

木の成長は遅くとも、確実である

アリャーカム+

子供のころ、私は手が不自由だったために、まわりの人々から特別扱いされていきました。

同じ年齢の子供たちも、私がすぐに怪我をし

てしまうおそれがあると思っただけ、いっしょに遊ぶことをさけました。悲しかったのですが、それはもう私の日常になっていきました。

そんな時のことです。テレビである番組を見ました。それは、子供向けの技芸などを教

える番組で、私のさみしさの味方になってくれました。家の中に普通においてある古い新

聞やダンボールなどを使ってきれいなペン立てや小さくてかわいい引き出しなどを作って

テーブルの上に飾ると、孤独を少し忘れることができてきました。

ある日、母の友人が私のモノ作りへの好みを見て、私に折り紙の本をプレゼントしてく

れました。紙を一枚しか使わずに、ジャンプ

するカエルやツルが作れるなんて、10歳の私
にとってはとてもすごいことでした。そして、
折り紙はいつの間にか、私の人生に欠かせな
いものになりました。

それから数年たって、私は日本語にもきよ
うみを持つようになりました。そして大学で
日本語の勉強をはじめました。

ある忙しい日のことです。私は授業が終わ
って、寮へ帰るところでした。その時私のス
マホから「ピン」と音がしました。スマホを
見てみるとクラスのグループアカウントに「
折り紙を教える先生が必要です」というメッ
セージがきていました。このメッセージを見
て私は何とも言えないぐらいのうれしさと、
何だか、一周回って、結局元の位置に戻って
きたような感じがしました。私はすぐに応募
しました。そして面接のために次の日さっそ
く呼ばれました。

わくわくしていた私は十五分前に会場に着
きました。しばらくすると担当者も到着しま

した。元気な声であいさつをして席にすわる
時、担当者は私の手に気がつきました。そし
て、ちょっとおどろいて「その状態でどうや
って折り紙を教えるんですか」と質問しまし
た。担当者に質問されて私も初めて私の手の
状態から起こる実際的な問題に気がつきました。
私は一人で本を見ながら折り紙を作ることは
できましたが、他の人に教えるには紙の折り
方をやって見せる必要があります。でも、私
にはそれができません。
「やって見せることができない、やって見
せることができない、やって見せることがで
きない...。まって、私（絵が描ける!）
長く息を吸ってから「絵を描いて説明しな
がら、子供たちに折り紙の折り方を教えるこ
とかできると思います」と、できるだけ明る
く積極的に答えました。
面接に受かったら次の日にまた連絡が来る
と言われて面接が終わりました。「来るわけ
ないじゃん、ちゃんとやって見せられる人を

選ぶのが当然でしょう。自己をんびんに沈み

ながら私は寮に戻りました。

「もう悩んでも意味ないし、私がこの状態

で生まれたのは私のせいじゃないし。あ、来

週は試験だから準備しなないと試験にもおちて

しまう」と考えながら、心配するのをやめて

次の試験の準備を始めました。

次の日の夜七時ごろ、勉強で疲れてちょっ

と休むところでした。そこに知らない電話番号

号から電話がかかってきました。

「もしもし、アリャーカムナ様でしょうか。

「はい...。」

「きのうの面接のことです。おめでとうござ

いいます...当日の授業について話し合いたい

ので、あしたの五時に来てもらってもよろし

いででしょうか。

「はい、大丈夫です。」

今までの人生の中であの時が一番うれしか

ったと言ってもいいすぎではありません。私

はさっそく授業のプランを作り始めました。

次の日、会議で授業のプランを発表しました。担当者もさんせいしてくれました。

折り紙の授業が終わると、子供たちがみんな私の席に来て、自分で作った折り紙をうれしそうに見せてくれました。

その純粋な笑顔を見たしゅんかん、私は思わず涙がこぼれそうになりました。あの笑顔が私の中の何かを変えました。

子供のころ、孤独を埋めるために必死で折り紙を練習していた私が、今ではたくさんの子供たちにかこまれて、その笑顔を生み出す側にまでなれるなんて、想像もしませんでした。あのころの私は一人でさみしさとたたかっていたのですが、その時の努力は決してむだではなかったと強く感じました。

やはり、木の成長は遅いかもしれないが、確実にある。その意味が、あの日、分かりました。